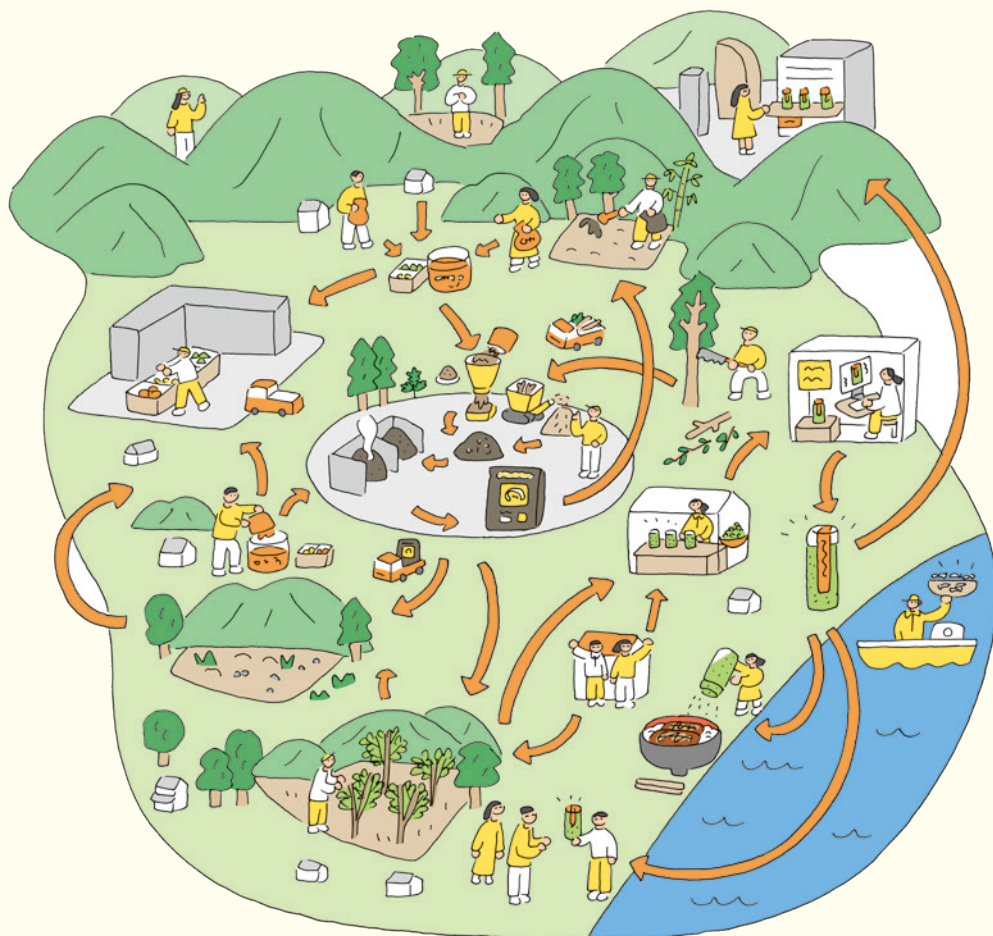


CIRCULAR VILLAGE FARM

循環 × 耕作放棄地



小さな畑から始まる、新しいチャレンジ

OSAKI

CIRCULAR VILLAGE FARM

循環 × 耕作放棄地

小さな畑から始まる、新しいチャレンジ

鹿児島県大崎町は、日本一のリサイクル率を誇る町。
住民・企業・行政が協力し、
資源を循環させる持続可能なまちづくりを続けています。

「使えない」と思われていたものの価値を見つけ、
新たな資源として活かしていくのが大崎町の特徴です。

その考えを、今度は「耕作放棄地」に広げます。
町には、長い間農薬を使っていない耕作放棄地がたくさんあります。
見方を変えると、自然に優しい「有機農業」に適した土地かもしれません。

そこで、大崎町では、家庭ごみから作られたオリジナルの堆肥を活用し、
土地をより良い土壌に変えていく取り組みを始めます。
そして、その土壌に地域に適した農作物を植え、
農家さんや、福祉事業者さんなど協働の繋がりを育みながら、
新しい特産品や仕事を生み出す仕組みをつくっていきます。

この小さな畑から、大崎町ならではの、また新しい次の「循環」が始まります。

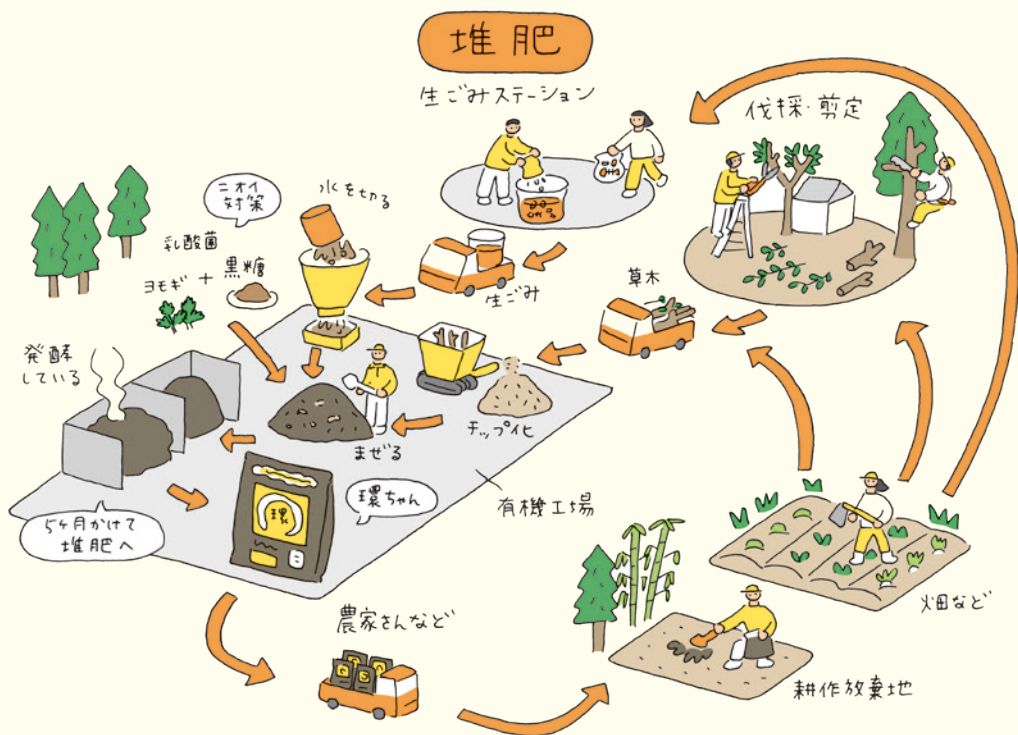
耕作放棄地



家庭の生ごみが生まれ変わる。 大崎町オリジナルの完熟堆肥

大崎町では、ごみを28品目に分別し、リサイクル率は日本一の84%(2024年4月現在)。この高いリサイクル率を支えているのが、「大崎町リサイクルシステム」です。埋め立て処分場の延命化を目的に、1998年(平成10年)に始まり、ルールづくりや人材育成、技術改善など、住民・企業・行政の協働によって実現しています。開始前と比べ、埋め立てごみを年間80%以上削減することに成功しています。

このシステムには、家庭から出る生ごみを回収し、専用の工場で発酵・熟成させて「おかえり環ちゃん」という堆肥に生まれ変わらせる仕組みもあります。この堆肥を使って育てた菜の花からは油を作り、「堆肥→菜の花→油→利用→回収」という循環も実現。ごみのリサイクルによる収益を活用し、奨学ローンの支援や海外のゴミ処理技術支援など、環境だけでなく、教育や経済にも好影響をもたらしています。



耕作放棄地は「未来の有機農地」

人口 1 万 2000 人の大崎町も少子高齢化の影響で、農業をする人が減り、田んぼや畑が使われなくなる「耕作放棄地」が増えています。放置された土地は、2～3 年で竹やぶになり、作物を育てることがますます困難になります。それだけでなく、害虫や鳥獣被害の原因になることも。

でも、大崎町には「使えないものを資源に変える」文化があります。長い間農業が使われていない土地を、有機農業に適していると考え、その可能性を活かそうとしています。農業や化学肥料を 2 年以上使っていない場所は、土壌が本来の力を取り戻し、有機栽培に適した環境が自然に整っています。また、過去に田畑として使われていた土地は、水路の整備もしやすく、有機農業に適した土壌環境を整えるのに適しています。もともと備わっている土地の力を活かしながら、大崎町ならではの新しい農業の形を生み出していきます。



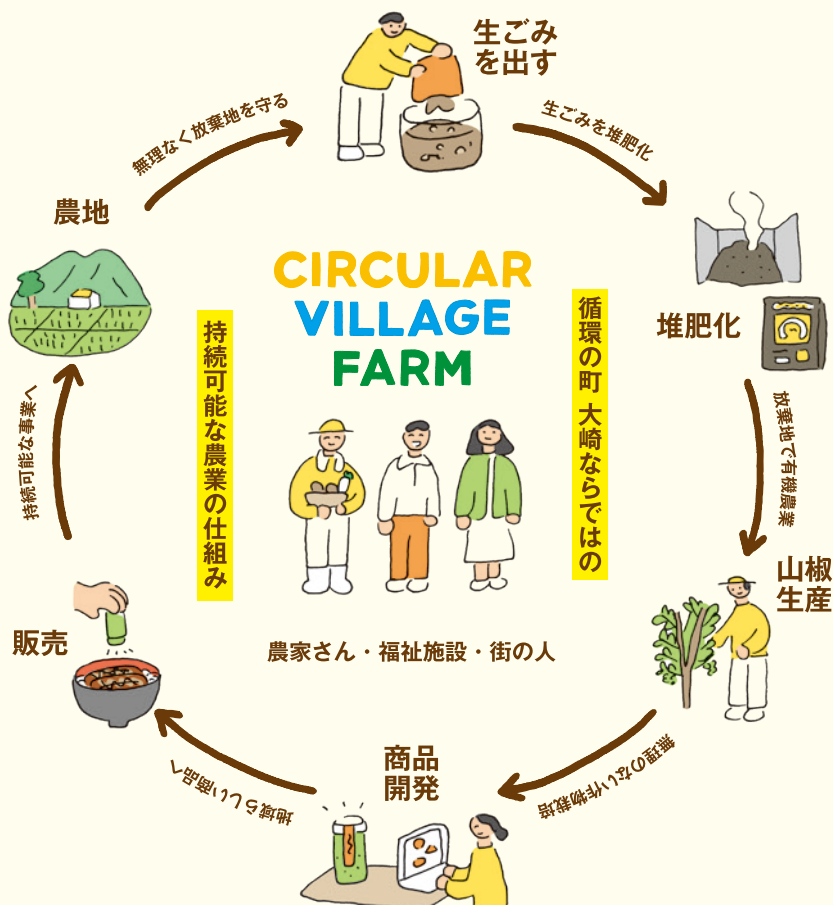
耕作放棄地から広がる、新しい農業のあり方

耕作放棄地にびったりな作物。それが「山椒」です。山椒には、山間部の日陰でも育つ、獣害の被害を受けにくい、軽いため収穫しやすく高齢の方や福祉施設の方も栽培できる、実・花・葉まで無駄なく使える、高需要で販売価格が高い——などのメリットがあります。地域のさまざまな人たちが長期的に無理なく関わるができる可能性をもつ作物なんです。さらに、大崎町には鰻やちりめんの文化があり、地元の食文化との相性も抜群！

将来的には、栽培から加工・販売までを町内で行い、新しい仕事や産業を生み出すことも考えています。たとえば、大崎町の飲食店には 地元で育てたこだわりの山椒がテーブルに並ぶ。そんな未来が実現したら、ちょっと素敵だと思いませんか？

山椒に限らず、各地域の気候や環境に適した作物を選ぶことで、それぞれの土地に根ざした持続可能な農業モデルを築くことができます。この取り組みが成功すれば、耕作放棄地の活用モデルとして全国へと広がる可能性を秘めているのです。

循環 × 耕作放棄地



小さな畑から始まる、新しいチャレンジ

OSAKI